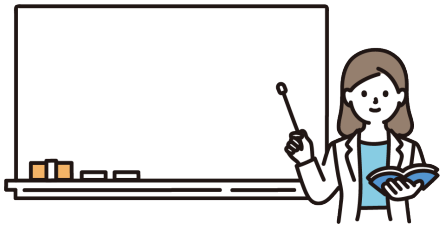
学生、保護者、教職員の皆様

教学 IR 情報の分析結果と令和5年度の本学の取り組みについて

令和 6 年 5 月
IR センター

川村学園女子大学は、学生の皆さんの大学での学修や生活について、さまざまな調査を行い、設定された目標に向けて学修がどのように進められているか、また学生の皆さんの大学生活が有意義で満足できるものになっているかを検証しています。ここでは、IR (Institutional Research)センターがその検証結果の中から、令和元（2019)年度から令和4（2022）年度までに収集された学生生活アンケートと、令和3（2021)年度から令和5（2023）年度までのアセ スメント・テストの追跡データの分析結果を報告いたします。さらに、このような教学 IR 情報の検証結果を活用して、大学の教育活動や学生さんの学修や生活が、より有意義で満足できるものなるように取り組んでいます。分析結果をもとに令和５（2023）年度に本学が行なったいくつかの取り組みの事例も紹介いたします。



（１）学生生活アンケートの分析結果

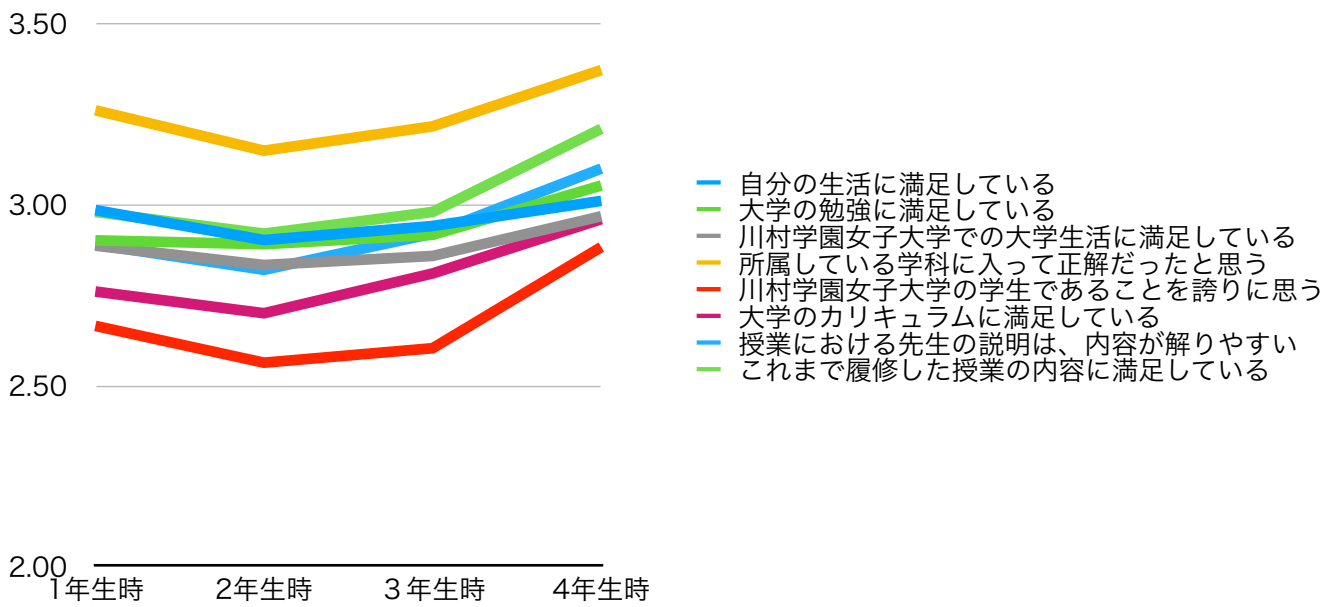
令和4（2022）年度の学生生活アンケートは5１.４%の回答率でした。その中から「満足度」「学修成果・成長実感」「学修時間」の３点について、分析結果を報告します。

1.　満足度

卒業生（令和元（2019)年度入学）の４年間の追跡調査の結果では、**大学生活への満足度は学年が進むにつれて上昇していました。**また令和4(2022)年度の各学年の満足度を比較してみても、学年が上がるほど満足度が概ね高くなっていました。（詳しくは、IR センターのホームページをご覧ください）

上級学年になるほど、ゼミなどの少人数授業が増え、また教員や他の学生と交流も増えるためではないかと考えられます。

図１　2019年度入学者の学年進行に伴う満足度の推移

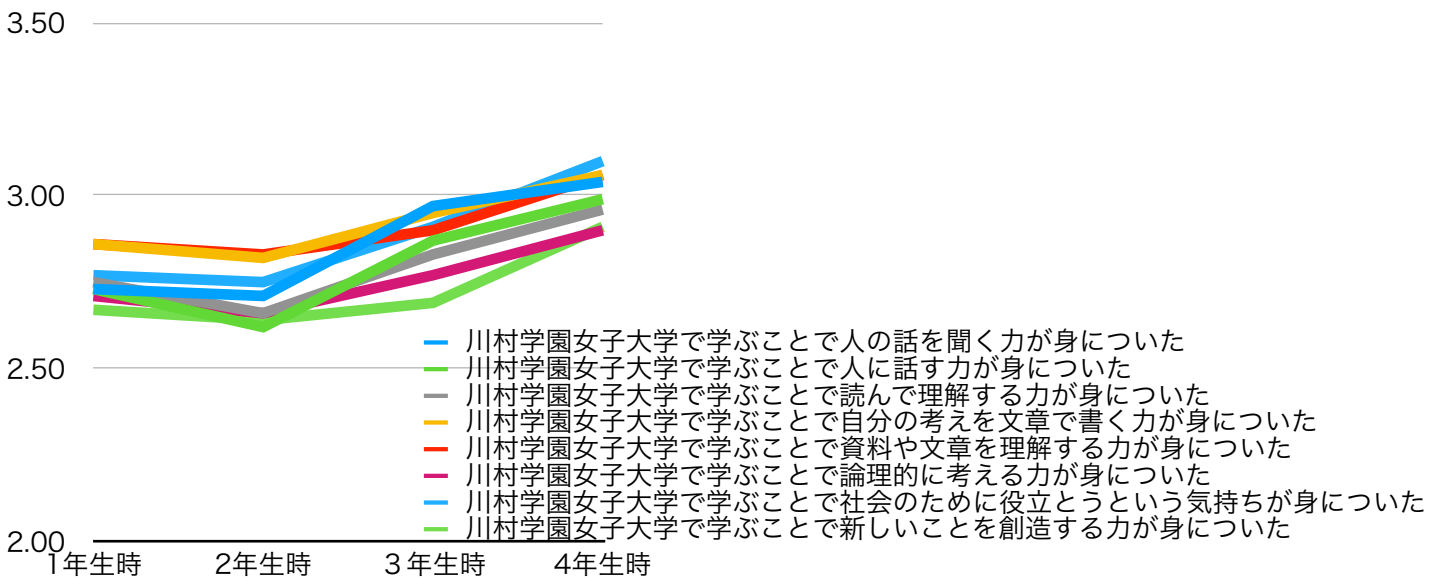


2.　学修成果・成長実感

満足度同様に卒業生在学期間、４年間の追跡調査の結果では、コロナ禍によりキャンパスでの活動が大きく制限された２年生時（令和2（2020年度）では低い値を示している設問もありますが、学年を追うごとに成長実感が上がっていることがわかります。また令和2（2022）年度の各学年の学修成果・成長実感の比較においても、学年が上がるに連れて上がっている事がわかります。（詳しくは、IR センターのホームページをご覧ください）

満足度同様に本学への在学期間が増すごとに学修成果、成長実感が上がっていることは、本学教員の「学生の学修」への取り組みが評価を得ていると考えられます。

図２　2019年度入学者の学年進行に伴う学修成果の推移



3.　学修時間

令和元（2019）年度から令和4（2022）年度までの過去四年間を比較すると、大学の授業の関する学修時間は、「１週間で５時間未満」が、2019年度では77.9％でしたが、2022年度は41.1％となり、年々減少している事がわかります。「１週間で５時間以上」の学生は令和元（2019）年度では22.1％に止まっていましたが、令和4（2022）年は46.7％となり、**年々増加している事**が解ります。

このアンケートにより、学生の学修時間の少なさを課題認識し教員内で共有し、取り組んで来た事が一定の成果を得たと考えられます。

半面、上記以外の学修（論文、資格取得、就職など）の学修時間についての過去４年間の比較では、１週間の学習時間が『３時間未満』が８割強、『５時間以上』が１割弱と、変化が見られません。（詳しくは、IR センターのホームページをご覧ください）

授業の学修へは積極的に取り組む学生が増えたものの、自身の将来に関わる自主的、主体的な学修への取り組みが弱い事が解ります。就職率低下の原因の１つでもあると考えられるため、早急な具体的な対策が必要であると考えられます。

（２）アセスメント・テスト(PROG)の分析結果

本学が現在採用しているアセスメント・テスト（PROG）は、学生の一般的な知的技能（ジェネリックスキル）を測定するテストで、問題解決力と言語・非言語処理能力を測る「リテラシー」と、

社会的スキル（対人基礎力、対自己基礎力、対課題基礎力）を測る「コンピテンシー」から構成されています。今回、令和3（2021）年度入学者の1年次と3年次（令和5（2023）年度）の分析結果から、２年間の学修の成果が検証されました。

1. リテラシー（問題解決力、言語・非言語処理能力）

1 年次と 3 年次の PROG 得点を比較すると、リテラシーでは、情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力、非言語処理能力は、3 年次のほうが高いことが示されました。しかし、言語処理能力は、1 年次のほうが高い結果でした。この結果は、**情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力、非言語処理能力については、２年間の学修が一般的な知的技能を高めていたことを示しています**が、言語処理能力については学修が不十分であったことを示唆しています。

2. コンピテンシー（対人基礎力、対自己基礎力、対課題基礎力）

コンピテンシーでは、対人基礎力、対自己基礎力、対課題基礎力の全てで 1 年次より3年次のほうが高いことが示されました。この結果は、**対人基礎力、対自己基礎力、対課題基礎力について、2年間の学習が知的技能を高めていたことを示しています**が、今後さらに学修成果を高めていくことが課題といえます。

本学の教育成果の検証は、学生の**就職先である企業**への調査でも行われています。令和5（2023）年7月に300社に対して実施された調査では、本学の卒業生は**対人基礎力（他者との豊かな関係を築く能力、目標に向けて協力的に仕事を進める能力）が高く評価され**ました。

（３）本学の取り組みの事例と教学 IR

本学は、学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)を掲げて教育活動を展開しています。ディプロマ・ポリシーは、学生が身につけるべき資質として３つを掲げています。ディプロマ・ポリシー1は「幅広い理解 言語的理解と表現」、ディプロ マ・ポリシー2は「専門知識方法の理解分析と思考力」、ディプロマ・ポリシー3「主体性 協働 社会規範」を身につけることです。今回の教学 IR の分析結果をもとに、教学マネジメント会議（令和5（2023）年6月、9月）では、ディプロマ・ポリシーに基づいた取り組みが 検証され、さらに今後の新たな取り組みが議論されました。

昨年度（令和4（2022）年）の教学マネジメント会議では思考力に低下が指摘されていましたが、今回のアセスメントテストの追跡調査では、言語的処理能力以外はリテラシー（問題解決力、非言語処理能力：ディプロ マ・ポリシー2の一部）では向上していたことを示していました。**これは昨年度から、大学による対応策としてICT活用した学修支援の取り組みを進めてきたことの成果とも言えるでしょう**。しかし一方で、言語処理能力の修得に課題を残しています。

また昨年度の教学マネジメント会議でやはり課題とされていたディプロマ・ポリシー3「主体性 協働 」について、今回の分析ではコンピテンシー（対人基礎力、対自己基礎力、対課題基礎力）に伸びが見られました。**昨年度と今年度のFD（ファカルティー・デベロップメント：教員研修）では、主体性を育む取り組みの好事例となる教員の具体的な授業を取り上げて、教員間で共有する取り組みが行われました**。このように大学としてIRデータの分析を起点とした取り組みは、今後も続けられます。

さらに今年度の教学マネジメント会議では、令和6（2024）年度の取り組みとして、ディプロマ・ポリシー1「幅広い理解」に関わる取り組みとして**副専攻データサイエンスが準備されています**。副専攻として所属学科に関わらずどの学科でもデータサイエンスの基礎を学ぶことで、社会で活躍できる幅広い教養を身につける機会を提供します。

学生生活アンケートの分析結果からも、本学の取り組みが学生の皆さんに高い満足度を提供してきたこと、また着実に学修時間や成長実感に結びついてきたことが示されています。このように、IR センターで行われている教学 IR 情報の分析は、学長を中心とする IR 委員会で検 討されて、さらに学長が議長となる**教学マネジメント会議**で具体的な対応策が検討され実行に移されてきました。今回の分析結果も、対応策の立案、実行、検証と活用(PDCA)という一連の流れの中で、活用されています。今後も、この一連の過程で、 本学の教育と学生の学修がより充実したものになるように、大学全体が取り組んで参ります。